

35 久木田大地
タイトル:Repetition_聖ヴォルフガングと悪魔 01
制作年:2023
素材:板、油彩
サイズ:H162cm x W130.3cm x D5cm

36 久木田大地
タイトル:Repetition_ヘントの祭壇画 01
制作年:2025
素材:板、綿布、アクリルポリマー、油彩
サイズ:H80.3cm x W267cm x D15cm

37 久木田大地
タイトル:BABY BUOY
制作年:2022
素材:板、綿布、油彩
サイズ:H162cm x W194cm x D5cm

38 久木田大地
タイトル:FLUID BABY_03
制作年:2024
素材:板、綿布、油彩
サイズ:H79.4cm x W89.1cm x D5.4cm

39 久木田大地
タイトル:C.Y.C.L.P.S_02
制作年:2025
素材:板、綿布、油彩
サイズ:H91cm x W72.7cm x D3cm *3部作

周辺・開発・状況

- 現代美術の事情と地勢 -

Ambient, Environment,
Circumstances
-The Topography of Contemporary Art-

Kaori Endo, Omyo Cho, Kim Riyoo,
Daichi Kukita, Sou Suzuki,
Soe Yu Nwe, MADARA MANJI,
Muhamad Gerly, Zheng Tianyi

クレジット

—

タイトル:周辺・開発・状況 -現代美術の事情と地勢-
日時:2025年4月26日–2025年7月21日

アーティスト:遠藤薫、オミョウ・チョウ、金理有、久木田大地、鈴木操、ソー・ユ・ノウエ、
MADARA MANJI、ムハマト・ゲルリ、鄭天依

主催:一般財団法人下瀬美術館、中国新聞社
後援:広島県教育委員会、大竹市教育委員会、中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、
テレビ新広島、FMIはつかいち76.1MHz

企画:齋藤恵汰 / 共同企画:松山孝法、李静文、根上陽子
下瀬美術館学芸員:山本和毅 / 下瀬美術館広報:川口田耶
デザイン:八木啓二郎 / PR&SNS統括:倉田佳子
SNSデザイン:湯浅万貴子、studio 雷 / 翻訳:池田哲

企画制作:BUCCHIGIRI Production / 運営協力:Living Together Co.、TAV Gallery
協力:大竹手すき和紙保存会、横川エリアマネジメント連絡協議会、よこいげい実行委員会(横
川まちの芸術祭)、YCA(横川創作者会議)、滋賀県立陶芸の森、co・iki、有限会社三沢管
財、ミナガルテン

設営:帆苅祥太郎、今尾拓真、朝倉毅、Ed Lee、野村純平、スーパーファクトリー株式会社
輸送:小西正秀、エバーアフターパートナーズ合同会社
スペシャルサンクス:朴星桓(Bozar Bunsik)、尹志慧(国立新美術館)

遠藤 薫 (えんどう・かおり)

1989年　日本・大阪府出身　東京拠点

—

1989年、大阪府生まれ。

遠藤薫は2013年に沖縄県立芸術大学工芸専攻染織科を卒業。2016年志村ふくみ主宰アルスシムラを卒業した。

沖縄や東北をはじめ国内外で、その地に根ざした工芸と歴史を基盤に、生活と密接な関係にある社会的、政治的な関係性を紐解く。

主に工芸技法を用いて「工芸」の拡張を試みている。その作品形態は、雑巾や落下傘、船の帆を含む舟そのもの、ガラスや陶芸など多岐にわたる。

近年は無意識の形に触れるべく、自身の夢から得た作品制作のアプローチをとる。

主な展覧会に、「国際芸術祭あいち2022」(2022、ノ宮市豊島記念資料館、愛知)、「Osaka Directory3 遠藤薫『重力と虹霓―南波照間島について』」(2023、大阪中之島美術館、大阪)「美術の中のかたち―手で見える造形　遠藤薫『眼と球』」(2023、兵庫県立美術館、兵庫)がある。

—

Note

遠藤薫は沖縄県立芸術大学で染織を学び、テキスタイルや陶芸を中心に、それらを融合したインスタレーション作品を制作しています。

　遠藤は制作にあたり、展示場所の歴史や地域に根ざした工芸の文脈を丁寧にリサーチすることを重視しています。その土地に暮らす人々へのインタビューや聞き取り調査を通じて得られる情報を作品制作の基礎としており、地域の文化的背景や記憶、日常の営みを深く掘り下げることが彼女の制作プロセスの特徴です。

　これまで 베트남 の伝統的な布を雑巾として使用したパフォーマンスや、蚕が作り出す絹を用いたインスタレーション、さらには第二次世界大戦の沖縄戦に関連した銃弾や陶器とコーラ瓶を同時に取り入れた琉球ガラスのインスタレーションなど、社会的なメッセージを繊細かつ象徴的に表現してきました。遠藤の作品は、単なる直接的な政治的主張ではなく、その土地の歴史や人々の記憶から抽出された思考が結果として政治的な意味合いを帯びるという特異な視点を持っています。これは民藝運動が持つ「生活に根ざした美」や「用の美」という理念にも通じ、日常の中に潜む社会的・文化的文脈を繊細に可視化することによって、作品の深みを増しています。

　今回の新作は「とるの・とるたす (旅と回転)」というタイトルです。これは、英語で旅を意味する「tour」が、ラテン語の「tornus」(回転)に由来し、この言葉が陶磁器を作る際に使用する「ろくろ」を意味することに掛かっています。遠藤は「旅」と「回転」の概念を結びつけることで、人や物が移動しながら文化や技術を伝え、それらが循環しながら新たな形を生み出すプロセスを象徴的に表現しています。

　この展示では、宮島のお土産品として知られる「御砂焼」の歴史的背景を調査し、陶器が朝鮮半島から日本へと伝わった経緯に焦点を当てています。唐津や砥部での陶芸制作に加え、江田島にて牡蠣殻を原料とした釉薬を使用している沖山工房の協力を得て、各地域の土を素材として取り入れたインスタレーションを制作します。この展示は、各地域の土が持つ固有の特性や記憶を呼び起こし、それらが織りなす文化的・歴史的な状況を視覚的に表現したものとなっています。（松山）

オミョウ・チョウ

1984年　韓国・ソウル市出身　ソウル拠点

—

1984年、ソウル市生まれ。

オミョウ・チョウはロンドン大学ゴールドスミス校を卒業。2019年に個展「タクシデルミア」で活動をスタートした。

チョウは彫刻、インスタレーション、ビデオを通じて、思索的な科学、深海の生物多様性、記憶に基づいた物語を探索している。彼女のディストピア小説『ヌーディ・ハルシネーション』(2022-)は、商品化された記憶の未来を思い描いており、人間中心の思考を批判し、未来の知性を想像する作品の基礎となっている。

チョウの活動は、e-flux、ARTnews、Oculaなどの記事で紹介されている。

主な展覧会や上演にフリーズフィルムソウル2023で上映された「パレル・アイ」(2022–23年、韓国)、2024年のアート・パーゼル・ステートメント部門にノミネートされた「ヌーディ・ハルシネーション」(2023年、スイス)などがある。

—

Note

オミョウ・チョウはロンドン大学ゴールドスミス校で美術を学び、ガラスと金属を主な素材とした彫刻作品やインスタレーションを制作しています。美術活動と並行してSF小説も執筆しており、自ら創作する物語から着想を得る独特な制作プロセスを特徴としています。思弁的な世界観を文章で具現化し、その物語を視覚的に再解釈することで、作品制作の基盤を形成しています。韓国をはじめヨーロッパでも精力的に展覧会を開催し、国際的な評価を高めている注目の若手作家です。

　2024年のアートパーゼルでは、チョウのインスタレーション「Nudi hallucination (2024)」が特に注目されました。この作品は、自身のSF小説『Memory Searcher (2022)』で描かれた記憶の転移というテーマを視覚的に探索しています。ステンレススチールや外科用チェーン、ガラス、銀、樹脂顔料といった工業的素材を使用し、有機的かつ繊細で複雑な形状を作り出しています。テクノロジーがもたらす未来的な現象や、ソーシャルメディアを通じて他者の記憶や経験を共有・追体験するという現代社会の特性を映し出しています。

　今回の出展作品「Nudihallucination #1(2022)」は「アメフラシ」をモチーフとしています。アメフラシは神経科学の研究において人間の脳細胞を理解する上で極めて示唆的な生物として知られていますが、チョウはこの生物を「未来の知覚を持つ生命体」として再解釈しました。特にアメフラシの神経経路が彫刻表現の流動性と類似する点に焦点を当てました。ガラス素材が持つ繊細な脆さと時間の経過を感じさせる静かな流動感が、金属が持つ堅牢な性質と調和的に結びつき、独特な視覚効果を生み出しています。ガラスと金属という相反する特性を持つ素材が一定の温度で溶け合う絶妙なタイミングを巧みに捉え、その融合過程が視覚化されています。

　チョウはSFを「未来の考古学」と表現したフレドリック・ジェイムソンの言葉に触発され、自身の作品を通じて生命の脆さや持続性、存在の儚さ、そしてそこから生まれる可能性を深く探求しています。作品には、私たちの生きる現代社会や未来に対する思弁的な洞察や示唆が織り込まれています。（松山）

12　ソー・ユ・ノウェ
タイトル: 観音 / 菩薩デンクタ
制作年: 2025
素材: 信楽土、陶 (薪窯)
サイズ: H20cm x W33cm x L36cm

—

13　ソー・ユ・ノウェ
タイトル: 観音 x 風景
制作年: 2025
素材: 信楽土、陶 (薪窯)
サイズ: H18cm x W17cm x L22cm

14　ソー・ユ・ノウェ
タイトル: 観音 x 青蓮 #1
制作年: 2025
素材: 信楽土、陶 (薪窯)
サイズ: H8.5cm x W8cm x L11cm

15　ソー・ユ・ノウェ
タイトル: 観音 x 青蓮 #2
制作年: 2025
素材: 信楽土、陶 (薪窯)
サイズ: H9.5cm x W11cm x L11cm

16　ソー・ユ・ノウェ
タイトル: 観音 x 青蓮 #3
制作年: 2025
素材: 信楽土、陶 (薪窯)
サイズ: H12cm x W15cm x L15cm
制作協力: 滋賀県立陶芸の森、coriki、Living Together Co.

17　鈴木操
タイトル: Untitled (Deorganic Indication) 03
制作年: 2023
素材: 漆喰、鉄筋、網の楊柳、綿糸、レジン、風船、その場の空気、風船を膨らませる動作
サイズ: H34cm x W90cm x D34cm *可変

18　鈴木操
タイトル: Untitled (Deorganic Indication) 04
制作年: 2023
素材: 漆喰、鉄筋、網の楊柳、綿糸、レジン、風船、その場の空気、風船を膨らませる動作
サイズ: H55cm x W37cm x D43cm *可変

19　鈴木操
タイトル: Untitled (Deorganic Indication) 05
制作年: 2023
素材: 漆喰、鉄筋、網の楊柳、綿糸、レジン、風船、その場の空気、風船を膨らませる動作
サイズ: 不明、可変

20　鈴木操
タイトル: Untitled (Deorganic Indication) 08
制作年: 2023
素材: 漆喰、鉄筋、網の楊柳、綿糸、レジン、風船、その場の空気、風船を膨らませる動作
サイズ: H54cm x W81cm x D53cm *可変

21　金理有
タイトル: 煌金彩虚視線刻入道
制作年: 2023
素材: 信楽土、陶
サイズ: H190cm x W120cm x D85cm

22　金理有
タイトル: 青紫彩線刻閃冠象入道
制作年: 2021
素材: 信楽土、陶
サイズ: H160cm x W85cm x D60cm

23　金理有
タイトル: 坐像 (磐船)
制作年: 2024
素材: 信楽土、陶
サイズ: 20cm³ *9部作

24　金理有
タイトル: 信楽狸変異体 -目一箇童子-
制作年: 2025
素材: 信楽土、陶
サイズ: H120cm x W40cm x D45cm

—

25　鄭天依
タイトル: あなたの廳に映る私の影
制作年: 2025
素材: ファウンド・オブジェ、ミクストメディア、IoTデバイス、シングルチャンネルビデオ
サイズ: 可変

26　遠藤薫
タイトル: とるの・とるたす (旅と回転)
制作年: 2025
素材: インスタレーション (宮島の厳島神社の砂、旅先の砂、全国の陶土 (韓国、唐津、有田、萩、砥部、西条、信楽)、広島 の牡蠣釉、平和記念公園の折り鶴の灰釉、宮島の弥山の頂上で1200年焚かれ続けている湯、竹など)、自作の焼物 (韓国の磁器、佐賀県唐津焼、佐賀県有田焼、愛媛県砥部焼、広島県お砂焼)、私物資料 (宮島のお砂焼、讀ってもらった各地の陶片など)、下瀬美術館コレクション (七世大木平藏製《染付食器一式》)、映像 (厳島神社の砂を持って旅をする記録、焼物の制作風景、折り鶴を燃やすところ、陶芸関係者インタビュー等)
サイズ: 可変

27　金理有
タイトル: 煌金彩果心樹線刻菩提日女
制作年: 2025
素材: 信楽土、陶
サイズ: H220cm x W100cm x D80cm

28　オミョウ・チョウ
タイトル: Nudihallucination #1
制作年: 2022
素材: ガラス、銀、アルミニウム、ステンレススチール、外科用チェーン、樹脂、顔料
サイズ: H120cm x W240cm x D130cm

29　オミョウ・チョウ
タイトル: Nudihallucination #2
制作年: 2022
素材: ガラス、銀、アルミニウム、ステンレススチール、外科用チェーン、樹脂、顔料
サイズ: H120cm x W200cm x D90cm

30　鈴木操
タイトル: 霊性
制作年: 2025
素材: FRPに彩色、鉄、ステンレス
制作スーパーバイザーおよび3Dモデリング: 帆苅祥太郎
彫刻制作: コスギ創研
サイズ: H180cm x W48cm x D54cm

31　ムハマド・ゲルリ
タイトル: いとなみとしての文字「連なり、重なる」
制作年: 2025
素材: テキスタイル (キャリコ、レーヨン、綿混合)、大竹和紙、顔料、油絵の具
サイズ: W120cm x L500cm *3部作

32　ムハマド・ゲルリ
タイトル: いとなみとしての文字「奇妙な顔たち」
制作年: 2025
素材: マスク (樹脂、顔料)、電球
サイズ: H30cm x W19cm x L20cm *8体、可変
制作協力: 大竹手すき和紙保存会、横川エリアマネジメント連絡協議会、YCA (横川創作者会議)、co・iki、Living Together Co.

33　久木田大地
タイトル: Repetition_ぶらんこ 01
制作年: 2024
素材: キャンバス、油彩
サイズ: H80.3cm x W65.2cm x D4.5cm

34　久木田大地
タイトル: Repetition_ぶらんこ 02
制作年: 2025
素材: キャンバス、油彩
サイズ: H227.3cm x W181.8cm x D6cm

ムハマド・ゲルリ

1997年　インドネシア・西ジャワ州カラワン県出身　カラワン拠点

—

—

—

1997年、インドネシア・西ジャワ州カラワン県生まれ。インターメディアアーティスト。

ムハマド・ゲルリは2017年–2021年、バンドンのテルコム大学でインターメディアアートを学んだ。歴史、民間伝承、空間的なランドスケープ、ローカルな土地の知恵・価値観がゲルリの創作の原動力となっている。

ゲルリは創作プロセスにおいて常に文学的・詩的な創作手法を用い、出会うすべての出来事から意味と詩的表現を紡ぎ出す。観客に新たな視覚的可能性と解釈を切り開く作品鑑賞の場を生み出している。

また、南バンドンの公共スペースで作品を制作することに焦点を当てたアート集団「Roompok Space and Artist Collective (ルームポック・スペース・アンド・アーティスト・コレクティブ) 」の設立にも積極的に携わり、パフォーマンス・アートに焦点を当てたアートコレクティブ「Performance Rar (パフォーマンス・ラー)」でも活動している。

主なグループ展に、「Valance of violence」(2024年、イギリス)、「POLYTOPIA -re.birth-」(2024年、オーストラリア)「Group Exhibition YxG.」(2022年、インドネシア)他がある。

—

Note

ムハマド・ゲルリは視覚芸術、パフォーマンスアート、テキスタイルアート、研究活動をベースにしたインスタレーション作品まで、分野横断的に活動するインターメディア・アーティストです。

インドネシアの西ジャワ州・スンダ族の末裔であるゲルリは、自身の芸術実験と家業である農業実践を通して、スンダに伝わり、また失われつつある言葉や文字文化を炙り出そうと試んでいます。

2024年12月に下瀬美術館を訪れたゲルリは、地元で失われつつある手仕事や地域文化をリサーチし、大竹市にある手漉き和紙に出会いました。また、宮島にある厳島神社の権禰宜の方にもインタビューをし、日本の宗教観、神様や神道について学びました。これらの経験を得て、大竹手すき和紙とインドネシアの布を組み合わせ、減少しつつある異なる2つの文化の“地勢”を融合させたインスタレーション作品を制作しました。

「死と復活」がこの度のゲルリの作品テーマとなっており、スンダ神話と固有かつ多様なアイデンティティのあり様を、広島で発見した日本の要素や地域史を重ね合わせながら表現しています。大きなテキスタイル作品には、インドネシアの“Mori” (キャリコ)と天然顔料を使用し、東アジアに共通する農耕文化由来の神話世界、スンダの豊穰神(女神)が描かれています。女神の犠牲を伴い豊作を祈るおとぎ話にゲルリは自身を支える土地や環境、地域コミュニティとの関係性を見出しています。

そして、8体のマスクは現代に生きる20代の若者として、如何に“土着的”な存在として居続けられるか、失われつつある民俗文化をどのように維持するかの葛藤が複数のアイデンティティのかたちとして具現化されています。

ゲルリは作品の中で神話における物語 (語り)と文字の力を引き出し、現代的な手法をもって、人間が自然の一部であるということ、そして、神話自体が私たちの生きる目的を持続させる世界共通の容れ物であることを気づかせてくれます。

そのような意味で、ゲルリの芸術実践は神話の社会的機能を発明し直す行為でもあり、地球上の無形の、見えない、まだ語られていない物事をアーカイブ(記録)するラディカルな手法を編み出していると言えます。（根上）

作品リスト

—

—

—

- MADARA MANJI

タイトル:Horizon

制作年: 2025

素材: 金属、コンクリート

サイズ: H250cm x W300cm x D300cm
- MADARA MANJI

タイトル:Uncovered Cube #146

制作年: 2024

素材: 金、銀、銅

サイズ: H10cm x W10cm x D10cm
- MADARA MANJI

タイトル:Ambivalence #03「牢獄の窓から青空を見上げ続ける勇気」

制作年: 2017

素材: 金、銀、銅、コンクリート

サイズ: H75cm x W40cm x D28cm
- 鈴木操

タイトル:Untitled (Non-homogeneous arrangement) 01

制作年: 2017

素材: ペロアで包んだ廃棄物に圧縮袋、ベルト、段ボール、運送業者が貼ったステッカー、　　ブーブークッション、設置・組み立ての動作

サイズ: 可変
- 鈴木操

タイトル:Untitled (Non-homogeneous arrangement) 02

制作年: 2017

素材: ペロアで包んだ廃棄物に圧縮袋、ベルト、段ボール、運送業者が貼ったステッカー、　　ブーブークッション、設置・組み立ての動作

サイズ: 可変
- 鈴木操

タイトル:Untitled (Non-homogeneous arrangement) 03

制作年: 2017

素材: ペロアで包んだ廃棄物に圧縮袋、ベルト、段ボール、運送業者が貼ったステッカー、　　ブーブークッション、設置・組み立ての動作

サイズ: 可変
- 鈴木操

タイトル:Untitled (Non-homogeneous arrangement) 05

制作年: 2018

素材: ペロアで包んだ廃棄物に圧縮袋、ベルト、段ボール、運送業者が貼ったステッカー、　　ブーブークッション、設置・組み立ての動作

サイズ: 可変
- 鈴木操

タイトル:Untitled (Non-homogeneous arrangement) 07

制作年: 2018

素材: ペロアで包んだ廃棄物に圧縮袋、ベルト、段ボール、運送業者が貼ったステッカー、　　ブーブークッション、設置・組み立ての動作

サイズ: 可変
- 鈴木操

タイトル:Untitled (Non-homogeneous arrangement) 10

制作年: 2018

素材: ペロアで包んだ廃棄物に圧縮袋、ベルト、段ボール、運送業者が貼ったステッカー、　　ブーブークッション、設置・組み立ての動作

サイズ: 可変
- ソー・ユ・ノウエ

タイトル:森羅万象の響きを抱くもの「観音 x 蛇神、信楽」

制作年: 2025

素材: 信楽土、陶（施釉）

サイズ: H135cm x W90cm x L95cm *dimension variable
- ソー・ユ・ノウエ

タイトル:森羅万象の響きを抱くもの「女嬬 x 蛇神、信楽」

制作年: 2025

素材: 信楽土、陶（施釉）

サイズ: H165cm x W85cm x L80cm

金理有 (きむ・りゆう)

1980年　日本・大阪府出身　信楽拠点

—

—

—

1980年、大阪府生まれ。

金理有は日本人の父と韓国人の母のもとに生まれた。大阪芸術大学大学院芸術制作研究科修士課程を修了。同大学院芸術研究科研究員、同大学院非常勤助手を経てアーティストとして独立。

金は縄文土器やその他古代の遺物のように一万年後の未来に残る作品を作るべく制作を行っている。その枠にとらわれない越境的な活動は現代美術家としても評価されている。国内での個展を多数開催すると同時に、横浜をはじめとして、韓国、香港、フランス、アメリカ、シンガポール、マレーシア等、様々な国での芸術祭、企画展、コンペティションに参加している。

主な受賞に神戸ビエンナーレ2009・現代陶芸展準大賞。

主な展覧会に、「Ceramics as new exoticism」(2010、INAXガレリアセラム、東京)、ヨコハマトリエンナーレ 2011 (2011、横浜美術館、神奈川)「ARTs of JOMON展」(2013、hpgrp NEW YORK、アメリカ)など。2018年度、陶芸で知られる甲賀市信楽町にある「滋賀県立陶芸の森」のゲストアーティストとして、レジデンスプログラムに参加した。

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

久木田大地 (くきた・だいち)

2000年　シンガポール・神奈川県出身　東京拠点

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

^[1] 6

^[2] 3

鄭天依 (ジェン・テンイ)

1995年　中国・湖北省武漢市出身　香港・オランダ拠点

鄭天依の作品「A Collection of Urban Nothingness」(ロッテルダム、2023)

1995年、中国・湖北省武漢市生まれ。コンテンポラリーアーティスト。鄭天依はフランク・モール・インスティテュートでメディア・アート・デザイン・テクノロジーのMFA (芸術学修士)を、香港中文大学で美術のBA (学士号)を取得している。香港とオランダを拠点に活動する学際的なアーティスト。鄭の作品は、映像、インスタレーション、パフォーマンスなどのメディアを横断しながら、現代社会の文脈における、アイデンティティ、記憶、そして移動 (ディスプレイスメント) のテーマを探求している。彼女の実践は、人間とノンヒューマンの主体との相互作用に深く踏み込み、現在における過去の残存を問う概念であるホートロジーを扱うことが多い。鄭はヨーロッパとアジアで幅広く作品を発表しており、近年のプロジェクトでは時間の循環的な性質や、ファウンド・オブジェクト (発見された物体) に宿る幽玄な痕跡に焦点を当てている。近年の主な展覧会は、「Hong Kong Qi」(深圳、2024)、「A Collection of Urban Nothingness」(ロッテルダム、2023)、「Ship of Fools」(香港、2023) がある。

鄭天依の作品「A Collection of Urban Nothingness」(ロッテルダム、2023)

Note

鄭天依は、香港とオランダを拠点に活動する美術家です。オブジェクト、映像、サウンド、パフォーマンスを組み合わせたインスタレーションを通じて、私たちが日常的に感じることのある「思い出せない過去に懐かしさを感じてしまう」ホートロジー (幽霊的存在論) の感覚がなぜ、どのように生じるかを、空間、地域、アイデンティティの複雑な関係性から探求しています。

新作「My Shadow on Your Dust」では「中古品」を扱うことで、物理的なものとデジタルなもの間で「中古」の空間はどのように連続しているのかという構造的な観点と、何か物質が単なるノスタルジーを超えて時間的な記憶や響きを持つにはどのようなプロセスが必要となるのかを考察しています。

広島のローカル・リサーチを基に中古品の多層的な存在性を掘り下げる三つの展示空間は、最初の部屋でフィールドワークでの取材をベースにした映像作品を、次の部屋で自動制御システムとIoTテクノロジーによって「再生された」オブジェクトを、最後の部屋で地域のリサイクルショップの日常風景を緻密に再現します。ホートロジー理論に基づき、このインスタレーションは、これらのオブジェクトが私たちの集合意識の中で文化的な亡霊としてどのように存続するかを考えます。

鄭は広島のリサイクルショップやコミュニティから収集したオブジェクトを通じて、物質的および感情的な残滓の両方に注目します。タイトルにある影 (Shadow) は人間の不在を示す負の空間であり、存在と空虚の対話を意味します。一方、ホコリ (Dust) は時間の経過と記憶の蓄積を表す詩的な隠喩であり、人間の存在の無常性と脆弱性を語りかけます。

影とホコリの相互作用は、アーティストが他者の歴史に入り込むプロセスにも比喩的に捉えられ、インタビューと収集されたオブジェクトを通じて明らかになった他者の生活の痕跡と、アーティスト自身の存在が交差する接点が現れます。(李)

鈴木操 (すずき・そう)

1986年　日本・埼玉県出身　東京拠点

鈴木操の作品「the attitude of post-industrial garments」(2022)

1986年、埼玉県生まれ。彫刻家・文筆家。鈴木操は文化服装学院を卒業後、ベルギーへ渡る。帰国後、コンテンポラリーダンスや現代演劇の衣裳デザインアトリエに勤務。その傍ら彫刻制作を開始した。主に彫刻が持つ複雑な歴史と批評性を現代的な観点から問い直し、物質と時間の関りを探る作品を手がけている。2019年から、彫刻とテキストの関係性を扱った「彫刻書記展」や、ファッションとアートを並置させた「the attitude of post-industrial garments」など、展覧会のキュレーションも展開している。また2022年から、ファッションやアートなどを取り扱うウェブメディア「FASHIONSNAPO.COM」にて連載。その他「ARTnews JAPAN」など様々なメディアで文筆活動を行っている。主な展覧会に、「open the door,」(2018年、roomF準備室、東京)「fortunes」(2023年、TAV GALLERY、東京)がある。

鈴木操の作品「the attitude of post-industrial garments」(2022)

Note

彫刻家としてファッション、キュレーション、文筆などを通じて様々な活動を展開してきた鈴木操は、ファッションデザイナーを志して文化服装学院を卒業し、1年間のアントワープ遊学を行なった後、20代の後半を舞台衣装の制作スタジオで過ごしました。

そして「着るもの」として人体を必要とする服飾に関わる活動と並行して、一貫して彫刻という形式、あるいは20世紀の彫刻における人体モチーフの欠落について考察してきました。自然と服飾に加えて彫刻作品も制作することになった鈴木は、具象と抽象や自然と人間といった二項対立に引き裂かれないNon-homogeneous arrangementやDeorganic Indicationといった彫刻作品のシリーズを制作することになります。

Non-homogeneous arrangementはカラフルな素材が輸送の際に使われたダンボールと対になって展示されます。この作品ではものの存在の仕方がテーマとなっており、分解されたパーツが輸送や收藏の際に、どのように動かされたり眠らされるのかが考察されます。またDeorganic Indicationは基体に嵌め込まれた膨らんだ風船が、周囲の環境により割れたり自然と萎えていくため、世話を必要とする作品です。

今回の新作「霊性」では今までの「人体というモチーフを具象／抽象という二項対立からどのように救い出すか」という問いからさらに発展し「人体はどのように扱うと見える／見えないという現象が起こるのか」という問いを具体的なテーマの一つとしています。

そのようにして制作された人体の中心部、特に自律神経系の臓器が意図的に切り取られ3Dモデリング・プリント技術で制作された彫刻は、現代社会における生の危機的状況を感じさせる一方、人間存在の新たな可能性を探り出そうとする企図が含まれています。

戦後アメリカの具象彫刻を参照しつつ、従来の人体彫刻が持つアーカイブの性質をも批評的に再解釈してきた鈴木は、彫刻史に埋め込まれた複雑な歴史的身体感覚と批評性を現代的な観点から探求することで、人体表現の規範性そのものを問い直そうとしているのです。(李)

ソー・ユ・ノウェ

1989年　ミャンマー・シャン州出身　信楽拠点 (2025年4月時点)

ソー・ユ・ノウェの作品「the attitude of post-industrial garments」(2022)

1989年、ミャンマー・シャン州生まれ。ソー・ユ・ノウェはミャンマーの中国系三世の陶芸作家で、粘土を使った手づくりの彫刻を制作している。仏教神話に登場する女性像にインスピレーションを得た彼女の最新作では、女性のアイデンティティにおける「自由」の概念を探求する。これまでにジャカルタ現代陶芸ビエンナーレ (2016年、インドネシア) やタイ・ビエンナーレ (2023年、タイ) で作品を発表、また、アートサイエンス・ミュージアム (シンガポール)、大英博物館 (ロンドン)、サムスン・リウム美術館 (ソウル)、クイーンズランド美術館/現代美術館 [QAGOMA] (ブリスベン) 等で展示を行っている。ソー・ユは「Forbes 30 Under 30 (Art & Style 2019)」に選出され、また、2023年にはCARE USAとロックフェラー財団からAdvocacy and the Arts Fellowshipを、2021年にはゲーテ・インスティトゥートReconnect Grantを授与された。現在、陶芸で知られる甲賀市信楽町にある「滋賀県立陶芸の森」のゲストアーティストとして、レジデンスプログラムに参加している。

ソー・ユ・ノウェの作品「the attitude of post-industrial garments」(2022)

Note

ミャンマー出身のソー・ユ・ノウェ (以下ソー・ユ) は粘土や陶 (とう) を扱うアーティストであり、自身のルーツでもある中国やミャンマー、東アジアの仏教神話や女神・女媧 (じょか) からインスピレーションを得て作品制作をしています。仏教が最も有力な自国ミャンマーを背景としたソー・ユの芸術実践は、その神話的世界を現代の文脈の中で更新し続ける行為とも言えます。

この度の展覧会に向けて、ソー・ユは京都の三十三間堂、バンコク、ヤンゴンの寺院を訪れました。神話世界の表象を新たに捉えるリサーチを行い、アジア諸国の地域性に応じてジェンダーが変容する「観音 (菩薩)」の存在に着目しました。中国、タイやミャンマーでは女性として描かれる観音像が日本では所により男性として表わされることがあります。ジェンダー・アイデンティティの切り替わるポイントが何なのか、そこに重要な意味が潜んでいるのではないかと思索し、ソー・ユは本作で新たな観音像として具現化させました。また、2024年より参加する日本六古窯のひとつである信楽での長期レジデンシー、広島市内・宮島・下瀬美術館を実際に訪れて見た周辺環境や景色、地域性は彼女の創作アイデアにかたちを与え、本展の作品制作の後押しとなりました。美術館の対岸に位置する宮島。そこに浮かぶ神仏の存在と重ね合わせ、島並みの水辺に佇む観音像の風景イメージを展示空間に投影しています。

この度の新作では、ソー・ユは身体を異なるパーツを組み合わせて実験的に表現し、また、作品素材である陶土や焼き上がりの釉薬の煌めき、変化する色彩と質感をもって女性の力やアイデンティティ、多文化主義・変容・多様性を表出させています。同時に、女性の身体が抱える揺らぎ、抑圧、時代を超えて内在化された性暴力、その声なき声が木魂 (こだま) します。絡まり合い、溶け合う双頭の観音像は、常に離反と融和を繰り返し、万物が流転する様子をも想起させます。

現代に生きる作家自身を取り巻く社会情勢やジェンダー問題、東アジアの多文化・多所的な《ディアスポラ・アイデンティティ》の様相が内包されるソー・ユの作品は、“女性性”の意味そのものを国境を超えて変質・拡張させるアフメーション (宣言) としても捉えられます。(根上)

MADARA MANJI (まだら・まんじ)

1988年　日本・東京都出身　埼玉拠点

MADARA MANJIの作品「the attitude of post-industrial garments」(2022)

1988年、東京都生まれ。MADARA MANJIは19歳から京都の彫金職人に師事し、金属加工の基礎技術を学んだ。その後、異なる種類の金属板を複数枚重ね合わせ、熱で溶着したのち削り出すことによって木目のような文様を浮かび上がらせる日本発祥の金属工芸、柰目金 (もくめがね) を独学で習得し、立方状のオブジェや、コンクリートと組み合わせた彫刻作品を制作する。また近年は「場所との因果関係」をコンセプトに、様々なプロジェクトを構想・展開。土地性や環境、建築に相互作用を与えるインスタレーションを制作している。2017年、個展「Antagonism and Transcendence」(Whitestone Gallery KARUIZA-WA) でデビュー以降、国内外のギャラリー、アート・フェアで新作を発表。2023年、これまでの活動をまとめた作品集『SOLID』を発表。同年末、デビューから最新作までの活動を回顧的に眺める個展「ALIVE」を山ノ内町立志賀高原ロマン美術館にて開催。2024年、大型の鉄のキューブ《ALIVE》を標高1,280mに位置する小海町高原美術館の野外空間に常設。

MADARA MANJIの作品「the attitude of post-industrial garments」(2022)

Note

MADARA MANJIは金属を主素材とする彫刻作品を制作しています。現在では希少となった伝統工芸技術「柰目金 (もくめがね)」を用いて作品を制作することを特徴とし、また最近では音を用いたインスタレーション作品を発表するなど、新たな試みにも積極的に取り組んでいます。国内での展示に留まらず、海外のアートフェアにも出展しており、国内外で高い評価を得ています。

彼の代表作である「Uncovered Cubeシリーズ」は、見る者に静かな感動とともに穏やかな驚きをもたらします。繊細な金属加工が生み出す緻密な模様と質感が、伝統と現代性を絶妙に融合させており、鑑賞者に深い印象を与えます。また作品や作家としてのパーソナリティが、人々に芸術への関心を喚起するきっかけとなってきました。彼の作品や展覧会が美術との最初の出会いとなったという方が数多く存在しており、そのパワフルなイメージは今回の展覧会においても野外設置という形式として現れています。

作品制作にあたり、人間の精神のあり方を探求することをテーマとしています。精神の複雑で多面的な因果関係やその状態を、柰目金技法特有のまだら模様に映し出し、本来可視化が困難な抽象的事象を具現化する点に、この作家ならではの特質が現れています。さらに2022年頃からは、自身の内面的な思考や観念だけでなく、「他者性 (外的要因)」も積極的に作品に取り込んでいます。展示する場所の地理的特徴や時間、風景に対する強い関心を持ち、それらを作品に反映させるようになりました。

昨年から本年はじめにかけて志賀高原ロマン美術館で開催された個展では、自然豊かな環境において、音と光を融合させたインスタレーションを発表しました。この展示では、自然との対話を通じて人間の感覚や認識を再考させる新たな体験を提供しました。また今回の新作「Horizon」は開催地である下瀬美術館周辺の地理的特徴を活かし、海岸沿いの工場街や、正面に宮島を望む借景を取り入れた立体作品となりました。他に「Uncovered Cubeシリーズ」「Ambivalenceシリーズ」からそれぞれ1点を展示しています。(松山)

^[1]
^[2]